

芥川だより

発行日 * 2022年2月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸
発行人 下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****

長時間労働は思考を奪う



朝6時に家を出て、夕方7時ごろに帰る生活を2ヶ月ばかり続けてきた。労働自体は警備なのでさほどきついとは言えないのだが、毎日続けていると、頭の中が空っぽになるようになる。労働と睡眠と食事などの時間に追われ思考する場と時間を失ってしまうように感じるからだ。

頭の中が仕事への注意力で覆われてしまい、自由な思考の余地がなくなってしまうというのが正しいかもしれない。物事を考えるには、自由な時間がある程度は継続しないと考えがまとまらない。コマ切れではどうにもならない。

今更ながら、分かったことは、いくら賢い人であっても生活に忙しく考える時間すら持てない人は、考えがまとまらないし表現も出来ないだろうということである。友人や書物など一見無駄とも思える行為の継続なしには新たな考え方は浮かんでこない。

じれったさを感じて久しい日本の社会もいつの間にやら、当たり前のようになり時間だけは過ぎていく。特別変えなければならない社会問題もないし、もう政治の事なんかどうでもいいじゃないの。戦争もなくやってこれたんだし。餓死者が出てるわけでもないし、みんなそれなりに生きてこれたんだから、もう政治の事はいいよ。ほんとにそう思っているの、仕事が忙しくて余裕が無いから、無理やりにそう思いたいだけじゃないの？

どうしてこうなってしまったんだろう？経済成長こそが、人を幸せにするという神話を誰が作り上げたのか？食べ過ぎるほど食べて、それでも足りずに食べ続ける。おかしいと思っても、やめずに続けてしまう。こんな行動は人間の本性なのか、それとも環境のなせるわざか。いや、錯覚で思い込んだ幻想の恐怖心から逃れられないだけかもしれないよ。複雑で分からなくなってしまった恐怖心とは、単純に考えて食べていくことだ。コンビニの弁当でもマクドでもいいが、食べられなくなる恐怖感だ。飢餓への幻想が未来への思考を萎えさせてしまうのか？

死をめぐるあれやこれ(87)

石川 吾郎

必要なことは緊縮財政を終わらせること

国の財政は、一つの家の家計や地方自治体の財政とは違う。これはその規模の問題でなく、本質的には国は貨幣を発行できるが、地方自治体や個人の家庭は貨幣を作りだすことはできない、ということにある。◆わが国はこの三十年近く経済成長をほとんどしていない。これは世界的に異常な事態だ。主に政府が税収以上の支出をしてはいけないという誤った方針で国を運営してきた結果、政府が実質経済に十分財政支出をして需要を喚起してこなかったのが大きな原因だと言われる。この誤った方針は具体的には毎年閣議決定で「ブライマリーバランス黒字化目標」という政府方針が決定されることで表明される。これは税収以上に政府は支出をしないという宣言だ。◆小さな政府を目指す政府のこの方針によって、「財源がない」と叫んで、庶民を苦しめる消費税の増税を繰り返す、公務員はじめ多くの労働者を非正規化し、営機関を民営化し、福祉・医療・教育予算を削り続けてきた。その結果は、大部分の国民の貧困化、ごく一部の企業・株主だけをますます富ますことになった。これには政府の不正な支出も大きくかかっている。◆派遣のパソナなどはその例だ。パソナは収益を十倍以上に伸ばしているが、その会長である竹中某氏は、相変わらず政府の諮問委員会に入りこみ、利益誘導を繰り返している。彼が罪に問われないのは現代日本の最大の不思議に他ならない。コロナで国民の多くが貧困化し疲弊している今、国民を直接救う政策を、直ちに財政出動して(赤字国債を発行して)行う必要がある。◆今年七月には参院選がある。ここで国民を見捨てるこの緊縮政策を終わらせる政治選択を、ぜひ

ともする必要がある。投票先の見分け方については、まず消費税廃止ないし消費税減税を叫ぶところ以外には、投票しないことだと思われる。また「身を切る改革」とは、よく耳にするが、新自由主義をさらに推し進めて、住民をますます貧しくするぞという宣言に他ならないことも覚えておこう。

素老人☆よもだ帳 (95)

坂本 一光

◆ 答えない問いを問うこと生きる

昔々、答えない問い(答えない問い)に自縛自縛になることがあった。ずいぶん時が経過してから、「どう考えても答えない出ない問いに時間を費やすことは精神的に「経済的」ではないから(答えがなければ問うことは非合理的であるから)、問わないことにした」というような内容の文章を読んだことがある。すっかり忘れていたが、答えない問いに悩んだことを思い出し、この発想の転換に「ああ、そう考えるのが大人なのか」と、はっとしたことがあった。しかし待て待て、それでも人は、生きている限り答えない問いを問いつけるだろうと思ひ、素老人もまた実際にそうであった。その意味で、「答えない問いを問うこと生きる」というのだらうと今でも思う。そんなことを思いながら、答えない問いについて五七五に詠ってみた。

答えない問いに答えた向こう傷
 答えない問いに問うなど叱られる
 答えない問いは心で暖める
 答えない問いが羽化する春を待つ

一方、答えない問いについてはどうだろうか。

答えるある問いに答えて優等生

答えるある問いばかり問う調子者

答えるある問いに答えた後ろ傷

などと詠んではみたが、「答えない問い」のうたに比べてどうもぼつとしない。どうやら、「答えるある問い」は、人にとって、少なくとも生きるうえでの本質的な「問い」ではないのではないか。そう思えてきた。

以上のようなことを考えたきっかけは、これまた、十年くらい前に書いた文章の断片を見つけたからである。その文章に言う。

「人は投げかける問い以上のものはない、かめない、と言う。高校の三年間は、私にとって、己との絶えざる対話の時間であった。学ぶのは、人間はどう生きてきたかに関わる。問うのは、自分はどう生きるかに関わる。そうではあるが、豊かで多様な前者に比して、私の場合、後者はあまりに貧弱であった。答えない自己との対話という孤独は、私にとって必ずしも静寂ではなく、ときに爆発しそうになった。そんな私を支えたのは、それが何かはわからないままに(今にして思えば、であるが)、生徒手帳に書かれていた「我らは世界的教養人たらんとし、世界の果てに愛と光をもたらし行かん」と言う言葉だったような気がする。…」

人は投げかける問い以上のものはつかめない、この言葉をどこでどう知ったのか今もってわからないが、この言葉は人が生きるこの本質を突いているのかもしれない。

ない。

こうして、人は、答えない問いを問いつける。問いつける人は、「善人」であつて、決して悪人ではないだろう。答えない問いを問いつけるようなことはしないのが、悪人なのだ。そんなことを考えながら、なんともわからなかった歎異抄の言葉を改めて考える。

善人なほもて往生をとぐ
 いはんや悪人をや

善人でさえ往生することができるとはどのようなことか。悪人が往生できるの言うまでもない、とは? 親鸞聖人は何を言いたいのか。逆ではないか、

悪人なほもて往生をとぐ
 いはんや善人をや

ではないのか。ずっとそう思つてきて、それ以上問うこともなかった。

答えるは、私にとって、思いもかけないところにあつた。私にとってであつて、聖人がどう考えていたかは知らない。

「善人」が問いつける答えない問いは、誰でも生きるうえでしばしば犯すことがある、あるいは犯さざるを得ない「罪」に関わるのだ。「善人」とは「悪人」ではないが、「罪人」なのだ。「悪人」は「悪」をなすのであつて、そんな「罪」は犯さない。イギリスのある作家がその小説の中でこう言つていた。

「キリスト者の社会の中心には罪人がい

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 87	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 95	坂本一光	2
哲学叢いの時事放談 45	祖藏哲	3
大峰奥駈道 51	下村嘉明	5
新型コロナウィルス愚考 (22)	明石幸次郎	6
オクラの山たより 65	因了生	7
隠された歴史 40	満田正賢	12
マルクスから学ぶ (12)	成瀬和之	14
俳句	土田裕	16
	影山武司	16
編集後記	S K 生	16
ふみの道草 44	山椒魚	17

る。しかし、それは、悪人や腐敗した人間が決して犯すことのない罪である」

この「罪人」はまさしく「善人」であり、自分が犯した「罪」について、言わば答えのない問いの底なし沼で喘いでいる。

そんな「善人」でさえ救われるのだから、「罪」など犯さない「悪人」が救われるのは言うまでもないであろうと、聖人は言ったのではないか。

いずれにしても、「答えない問い」とは何か、生きるうえで犯さざるを得ない「罪」とは何か。人類は今、改めて考えるべき時代に生きているように見える。

（かたちは心であり、心はかたちになる）
■大分の素老人

「哲学爺い」の時事放談（45）

祖蔵 哲

「反ワクチン」の哲学

いよいよコロナ第六波がやってきた。昨年末には「日本人特殊論」などから、「日本には来る、来ない」という議論が盛んであったが来るものは確実にやってきた。そこで頼みのワクチンである。ワ

クチンとは、原因となる病原体に対する免疫をつくり、そのことで感染症にかかりにくくしたり、かかっても症状を軽くしたりする機能を促進するもので、以前は「生ワクチン」や「不活性ワクチン」と呼ばれる病原性を弱めた病原体そのものが主流であった。しかし開発時間がかかり、また副反応の問題もあり近年はDNA研究発展の成果として遺伝子操作をしたワクチンが開発されてきている。

開発期間の短縮がメリットであるが、十分な臨床実験が行われているかどうかの不安も残る。さらに人間の遺伝子を操作することによる将来の影響については未知である。

このような不安材料を残したままこのRNAワクチンであるが、その接種義務化で世界中に混乱がおきている。

(1) ワクチン接種義務化と「反ワクチン」

ワクチン接種で先行した、イスラエル、カナダ、米国などの国々では、特定の職種などにワクチン接種を義務付ける動きや、ワクチン接種を施設利用の条件とする動きが広がってきている。その義務化の動きはイギリス、フランス、ドイツまでも広がっている。それに伴ってそれに抵抗する「反ワクチン運動」も起きている。日本ではあまり報道されていないが、現在カナダで新型コロナウイルスワクチ

ンの義務化に抗議するトラックデモ隊が米国との国境の一部を封鎖し、両国間の往来や通商に支障が出ている。首都オタワでも先月末から大規模な抗議デモが続き、地元警察が軍の介入の必要性を示唆するなど長期化への懸念が高まっている。また、未接種だったためにテニスの全豪オープン出場断念に追い込まれた世界ランク1位のジョコビッチ選手の話は最近の関心でもあった。

健康上の理由などによる「ワクチン忌避」は個人個々の諸事情による接種拒否であるが、「反ワクチン」は「義務化」そのものに対する拒否であり抗議である。しかし、「磁石がくつつく」「マイクロチップが入っている」というような根拠のないデマを流し、「陰謀論」で不安をあおる人々もいる。これらの人々は現在の政治権力に対する不信感を「不安」という感情的なものを利用して自分たちの思い通りにさせようというものである。ここには「理性的」な意見交換を通じて、個性、多様性を尊重するという考えはみられない。

しかし一般的には「反ワクチン」は強制的義務から「自由」を守るという思想運動と考えてよい。ではなぜ、「自由」や「民主主義」が発達しているといわれる欧米の国々で「強制的義務化」が盛んで、あまりそれらの意識が少なくとみられる日本など東洋ではそれほど強制されていないのかという疑問が残る。

(2) 空気を読む

世界の面白ジョークに以下のようなものがある。

【船が沈没しそうになり、乗客は海に飛び込まなくてはならない状況になった。船長は乗客の国籍ごとに違った説得をし、全員を飛び込ませることに成功した。】

アメリカ人には「さあ飛び込んでください、ヒーローになれますよ！」
イタリヤ人には「さあ飛び込んでください、女性にモテますよ！」
フランス人には「飛び込まないでください！」

日本人には「さあ飛び込んでください、もう皆さん飛び込みましたよ！」
以上、若干バイアスがかかっているが、日本人が命令や義務に対して個人判断の判断で行動するのではなく、周りの影響で動かされやすいということを表している。

ご存じの通り、日本には法律や条例によってワクチン接種を「義務化」することはできない。しかし、欧米ではそれが可能である。つまり、日本では法律や条例によって義務化しなくても周りの人の様子を伺い全体に従うのである。それには特別な命令や強制は必要でない。いわゆる「付度」してお上に従うのである。

これは統計にも表れている。世界の国別ワクチン接種率のトップは韓国で8

5%で次いで中国、そして日本80%である。しかし義務化を法制化しているフランスでさえ76%、アメリカはまだ63%という低さである。すなわち、個人主義の欧米諸国は義務化してもなかなか接種率が向上せず、集団主義的傾向をもつ日本をはじめとする儒教国はそれがなくとも周りに従うのである。これらの国々は法律によって義務化しなくとも全体的に命令に服従するのである。周りの「空気」を読みながら。

(3) 「反ワクチン」の自由思想

「反ワクチン」の思想根拠は権利としての「自由」である。命令としてのワクチン接種「義務」に対してそれを拒否する自由である。

一般に「自由」であるということとは、「勝手気儘」と理解される。つまり自分で好き勝手になんでもしてよいということである。しかし、無人島でただ一人住んでいるだけならそれでなんの問題もないが、人間社会ではそうはいかない。多数で生活する場合にはそれぞれの「利害」が衝突する。私にとつての「利」は他者にとつては「害」になる場合である。そこでこの自由は制限されるべきであるとその最低限の範囲を設定したのが、19世紀イギリスの政治哲学者J・S・ミルの「他者危害原則」である。

この原理によれば、一般に、政府や世

論によって禁止することが許されるのは、他人に危害を与える行為だけである。ミルは『自由論』において、次のように述べている。『人類が、個人的にまたは集団的に、だれかの行動の自由に正当に干渉しうる唯一の目的は、自己防衛だということである。すなわち文明社会の成員に対し、彼の意志に反して、正当に権力を行使しうる唯一の目的は、他者にたいする危害の防止である』これに加えてミルは「あなたのためだから」という理由でまわりの人が強制的に何かをやらせたりすることも自由の侵害としている。

(4) 「ワクチン義務」の根拠

「ワクチン接種義務」は先のミルが付け加えて否定した「あなたのためだから」という強制義務に属している。「あなたは嫌がるけれど、結局はあなたの健康のため、社会の利益のためだ」という理由である。これは「パターナリズム」と呼ばれている。

パターナリズムとは、親が子どものことを慮るように他者に対してとる保護主義的立場のことである。ギリシャ・ローマ語における父親(パテル)という意味に由来する。

パターナリズム立場が一般的におこっている際には、他者が文字通り判断において保護すべき幼児レベルで自己決定できない場合や、その義務介入意図が社会的

善意にある場合において認められると考えられている。あまり気がつかないが、交通法規によるシートベルトやヘルメット着用義務などのように十分に判断力がある大人でもこの種のパターナリズムの規制を受けているものである。

「反ワクチン」が批判するのは当事者の自己決定権の侵害である。その上批判されるのはこの義務介入意図「社会的善意」、つまり「ワクチンの安全性」である。

この反対運動は自由を制限する権力の根拠そのものも批判している。

(5) パターナリズムの理論

パターナリズムは、力のあるものが、力のないものによって、「善行する意図」による介入なので、しばしば権力や暴力を持つものの正当化の論理ではないかと議論されてきた。たとえば国際紛争における侵害・介入の「パターナリズム」、しばしばパターナリズムという形で表現され、その構図がしばしば反植民地主義という観点から批判されてきた。たとえば、かつて、

西欧列強諸国によるアフリカ植民地政策では、統治されるアフリカの人たちは子供として取り扱われ、植民地省当局は彼らに対する温情的干渉を正当化した。そのためアフリカの人々には政治的統治能力がまったく無きがごとく取り扱われ、その代わりに彼らに福利厚生を与えるという態度をとってきた。

(6) 自由…自己決定の重要性

ミルの「他人に危害を加えないかぎり、個人は何をしてもよい」というこの危害防止原理の背後には、「各人は自分の幸福についてだれよりもよく知っているのだから、自分のことは自分で決めるのが一番だ」という前提がある。すなわち、人々は基本的には他人に干渉されない方が、自分の幸福をよりよく追求することができるという信念がある。さらにこの自分の幸福を追求することが全体の幸福につながるという考えも出てくる。「空気を読む」ことによって全体が同じ方向に進む場合、メリットよりも危険性が多いのは歴史が証明している。それは現在の善が必ずしも未来の善と同等ではないからである。歴史の経験から我々はたいいていの場合、未来を善の方向に転換したのは少数の人々のアイデアからだということを知っている。「集団主義」が行き着く先は破滅である。

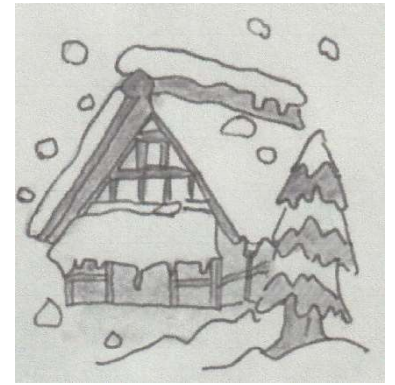
(7) フリーライダー…「ワクチン義務化」のもう一つの根拠

ワクチン接種によって免疫をもつひとが増えれば社会に「集団免疫」ができて細菌やウイルスは広がらない。ワクチンを打つことは自分が病気になるだけでなく、社会全体を感染症から守ること

になる。これは他者に「危害」を与えるのではなく「利益」を与える行為になるから社会は推奨すべきということになる。ところがこの「利益の外部性」は、フリーライダー（ただ乗り）というやっかいな問題を引き起こす。ワクチンを接種するひとは、副反応のリスクを負って、社会に正の外部性を提供している。そうになると、反応のリスクを負わずに（ワクチンを接種せずに）外部性の利益だけを享受しようとするひとが出てくる。これがフリーライダーである。

集団免疫を獲得するためには、人口の7割のワクチン接種が必要とされる。副反応が不安だとして半分が接種を控えたとすると、集団免疫はできずに感染が広まり、緊急事態宣言で飲食店などが多大な損害を被る。こうした事態を避けるためワクチン接種は義務化されてきたという別の経緯もある。

さて、今号もコロナ関連のテーマであった。新型コロナウイルスはまだ今のところ人類にとって共存すべき存在でなく、戦うべき敵の段階である。戦いや戦争において必ず持ち出されるのが「自由の制限」である。敵を集中して攻撃しなければ相手にやられてしまう、そのために個人の自由は規制される。しかし、ドイツの政治哲学者・X・シュミットが言うように、「敵」を作って自由を奪うのもまた政治権力の常道である。



大峯奥駈道（51）

下村 嘉明

この歳になって働きに出なければならぬとは、夢にも思わなかったが、勇気を出して外へ出て働き始めると、意外や意外、私の人への好奇心が芽生え世の中が奇々怪々の不思議で面白い世界に見えだした。

他人をとやかく言うのは気が引けるが無責任に人の生きざまのほんの少しの断片に過ぎないとは思っけれど、書き綴ってみてみたい。他人をどう見るかは、自分の心の持ちようでもあるから、自分の心模様を描くことにもなる。

序章

これから書く文を「体験型人間学」と名付けた。これまでの民俗学的な調査を目的とするものや、何かの形で発表することを前提とした聞き取りとは違い、

何の目的もなくふと漏らした一言や姿を私流に描写したに過ぎないから、どれほどの価値があるかはわからない。いや、無くてもいいのである。私がやりたかったことだから、たとえ誰からも評価されず読みもされず消えて行ってもいいのである。それでも、書いてみたいと思うのは、人間の本质は何か、人間の生きざまとは何か。このことを私なりに追求したい思いがあるからである。

このような思いの根底には、人間好奇心と私の持つコンプレックスが作用していると思う。何故そうなったのか、何を考えているのか。出来るだけ知りたいと思うのである。

「怒鳴られて覚えるか、見て覚えるかしかない」今の警備の仕事についてたころに、先輩の爺様から言われた言葉だが、なかなか妙を得ていると感じた。人は人から色々なものを見よう見まねで覚え次の世代に伝えてきた。まさにその現場で見聞きする偶然的な言葉や行動を通して人間の持つ面白さ可笑しさを探ってみた。メモを取ることもせず、私の不確かな記憶を頼りに書きますのでその点はご了承ください。記憶力が出来るだけ衰えない事を祈るばかりです。まずはこの人から始めようか。

芦屋の浜に架かる大橋の改修工事の警備について6日目だったと思う。大きな橋なので3名で警備していた。先輩の警

備員と私、そしてよぼよぼの爺さんがいつものメンバーだったが、その日は、よぼよぼの爺さんが休みで代わりに更に年配と思える爺さんが加わった。なんという会社かと半ば呆れながら、見方を変えれば高齢者の福祉事業とも思えるような会社だなあと、思いながら爺さんを見ていた。

昼飯を食べながら、爺さんと話をして驚いた。仮名で川内さんと呼ぶ。私より一回り年配で82歳だと言われる。私の父が亡くなったのも82才だったから、驚くべき体力と精神力だと、川内さんを褒めると川内さんは、得意になって彼の人生を語りだされた。学生時代は、柔道選手で講道館で練習されたという。卒業後は、商社の安宅産業に就職され繊維関係の仕事が続け、伊藤忠商事と合併後も商社に残られたそうである。なかなかのエリートですねと、話を折って「何ゆえに、働くようになったのですか？」と聞けば「家のローンを長期返済にしたので、まだ残っていて息子に迷惑かけたくないから、働くようになった。一時期、病気をしたので、健康回復の為に毎日、2万歩は歩くようにしていたので、警備の仕事では、平均1万歩ぐらいなので、仕事の帰りに1万歩ほどは歩くようにしている、と言われる。

少し腰や首が曲がりかけた川内さんは、その日も、寒くて凍えそうな夜の暗い道を電車に乗らず歩いて夕闇の中に消えて

いった。私の未来の姿を見たように思えて、何ともいえない想いがこみあげてきて胸が熱くなった。

新型コロナウイルス禍愚考(その22)

明石 幸次郎

最近の世間を騒がす「拡大自殺」と言われる自殺願望者が他人をも殺害して自分も死ぬとか、死刑になる凶悪な事件を起しているのは、大抵は男である。

尤も、自殺者は男は女の2.1倍と言われていますが、「拡大自殺」と言われる犯罪を犯すのは、女性は子供を道ずれに心中することがあっても、あかの他人まで巻き込んで死ぬような事件は聞きません。

以前、秋葉原殺傷事件、走行中の東海道新幹線の中で男女3人が刃物で襲われ、そのうちの男性が死亡する事件、近々では、京都アニメーション無差別放火で36人亡くなり、犯人は負傷、大阪北新地ビル放火で犯人を含む26人死亡、埼玉県自宅立てこもりで医師等を殺害、負傷させた悲惨な事件等が起りましたが、加害者は全員が男です。

なぜ男は弱いのか？ 言葉は悪いが一人で死ねないのか。生い立ち、貧困、差別、世の中、他人に対する、攻撃、恨み、憎しみは、性にかかわらず、持っています、それが犯罪の動機になるが、それが直接的に自分に関係のない人まで巻き込んで、死のうと男はするののか？

男は孤独に弱いといわれますが、家族、親族それに仕事を通じて社会とか、会社に属していると、人間関係で何らかのつながりを持つておれば、孤独を感じる機会は少ないが、失業とか、定年退職などで、経済的、社会的活動を失ったり、離婚、死別などで伴侶、恋人などを失うと忽ち、喪失感から孤独、孤立を感じて不安になりがちです。同時に自分の存在感、自己価値観などが薄くなり、自分など生きていても良いことがない、生きることに意味がないと思いがちになります。

そういう時に何でも話せ、相談出来る友人等の話相手がいると救われずし、犯罪、自殺を踏みとどめる力になります。ニュースから窺われるのは、拡大自殺を實行した加害者は、犯行に至るまで苦悩しながき苦しんだと想像しますが、そのしんどい気持ちを聴いて、共感してくれる人が周りに居なかったと思います。又、男は自己承認要求が強い割には、プライド、世間体、コミュニケーション能力が弱い為、欲求不満、怒り、諦め、攻撃性を自分の心に溜め込んで、鬱になったり、他人を傷つけるような犯罪を犯

したりしてしまう様です。特に自己責任能力主義、努力重視を重要視する社会になるほど、その流れにこぼれてしまうと、その原因を他者に転嫁して自分を守ろうとしてしまいます。今の日本社会を「一億総他責社会」とタイトルにして本を書いた精神科医(片田珠美)がいますが、言い当てて妙ですね。

その著者は、今、生きづらいと訴える人が多い。そういう人の訴えを精神科医として聞く機会がしばしばあり、なぜ生きづらいか、その原因は一体何なのかを問いつつながらこのタイトルの本を書いた言葉で書かれています。(初版2019年2月)

この本のはじめに、メディアで報道された事件や騒動、あるいは私が実際に相談を受けたケースを分析した結果、皆被害者意識を抱き、不満と怒りを募らせていることがわかった。不満と怒りがあまりにも強いと、罰を与えたいという懲罰要求も生まれる。しかも、不満と怒りの原因を作った本来の相手に対しては、怖くて怒ることが出来ない。だから、無関係の弱い相手に怒りをぶつける。つまり、怒りの矛先がずれているわけだが、このずれが日本中の至るところで生じている。いわば八つ当たりする人が増えているのだと書いて、おまけにかつては権威があると考えられていた人物や組織の不祥事が相次いでいるが、その責任を誰も取ろうとせず、責任を押し付け合っている。つまり、何でも他人のせいにする他責的

傾向が強まり、日本は「一億総他責社会」になりつつあると書き、この「一億総他責社会」で誰もが自己保身を最優先し、責任を押し付け合い、足を引っ張り合っているからこそ、生きづらいのだと思う。しかも、こうした他責的傾向は皮肉なことに「自己責任」が強調されるほど、強くなる。と書いています。

私は、この本を読んで一番に感じたのは、安倍元首相が自らと身内の不祥事を誤魔化し、周りの者に付度させて「モリカケ、桜、河合議員問題」に対して何ら責任を取らず、麻生大臣の失言問題を庇い、はたまた、自分のした事を、はぐらかし、語句不明、意味不明、誤魔化し説明上手? の官房長官を菅さんを論功行賞の消去法で首相にした時期に他責人間が増えたのでは、と思ったことです。これら、政治家、企業のトップも弱い立場の人にしつこいクレームを言うなどは皆男です。

いのちの電話にも、寂しい、しんどい苦しさを抱えて他責社会、人を恨んだりして、死にたい、犯罪を犯してもいいとか言う電話があります。特に何回も掛けてくるのは、男が多いようですが、まだ、電話をかけてくる男は多少は救われている様です。掛けてくる男は、私みたいな同性よりも女性に聴いて貰う方が、救われるようです。それは、女性の声から聞こえる応対と声が掛け手に「母性」を感じさせる力があると精神療法の心理学者

は言われています。これは男と女の根源的な違い、孕む力、生む力だとも言われています。

「ここでも、私は女性相談員に負けて？ ますが、これを他責には、出来ませんが、周りの男性相談員に受ける印象は、多少女性的な人が多く、優しい、競争社会には適さない人が多いように感じます。この私は、高校野球二回戦敗退、学校の成績奮わず、入った会社でも出世せず、競争社会では落ちこぼれかとも思っています。私もしんどい人生やなあ！ とこの原稿を書きながらコロナ禍で感じています。(自嘲)

オクラの山たより (65)

困了生

一

「月日は百代の过客にして行きかふ年もまた旅人なり」という書き出しで始まる松尾芭蕉の「奥の細道」は中学校や高校の教科書にも載せられており、この冒頭の一文を暗記させられた人も多いでしょう。しかも念の入ったことに「百代」は「はくたい」、「过客」は「かかく」と元禄時代当時の読み方のままで暗誦す

る習慣になっています。作品の中に出てくる「草の戸も住み替る代ぞ雛の家」や「夏草や兵どもが夢の跡」という句までそらんじている中高生も少なくありません。古典教育削減の動きが激しい今日の教育状況では近世の文学まではとても手が届かないという悲鳴にも似た教師の声をよく耳にします。そんな中であって「奥の細道」はきちんと扱われている近世文学の唯一の存在といえます。

もちろん「奥の細道」が生まれた当初からこのような存在であったわけではありません。

奥州への長い旅を終えたのは一六八九(元禄二)年の八月下旬。その後、上方や故郷の伊賀上野に滞在し江戸にもどったのは一六九一(元禄四)年の十月末のことです。「奥の細道」の執筆に取りかかったのは一六九三(元禄六)年の頃で清書が完成したのは翌年の初夏とされています。「奥の細道」の清書本には「曾良本」「柿衛本」「西村本」、さらには芭蕉自筆本とされる「野坡本」があります。しかし、当然のことながらそれぞれ一冊しかない本であり、これを読むことができるのは芭蕉の周辺にいた極めて限定された人間でした。この「奥の細道」を一般の人々に向けて大きく道を開いたのは京の井筒屋庄兵衛の版本で一六九九(元禄十二)年あるいは一七〇二(元禄十五)年のこととされています。いうまでもないことですが版本は商品

で代価を支払えば誰でも手に入れられます。摺り物や版本などの印刷物は奈良時代からありましたが、あるいは寺院や宗派内での配布物であったり、あるいは支配者や富豪の娯楽として愛玩物であったりしました。しかし、近世の出版形態は町の本屋が印刷・製本して店で売るということ、それが以前とは大きく異なる点でした。読もうという意欲と一定の金銭があれば誰でも読めるようになったことは文化史上の革命といってもいいほどの出来事でした。しかも「いろは四十七文字」と多用される漢字の崩し字をある程度マスターすれば何とか読むことは可能です。講読する人の数はいたるところで増えていきました。

この元禄版本は何回も増刷を重ねていったらしく刷りの悪いものを含めて、あちこちで現存が確認されています。それだけ需要があつたのでしょう。さらにこれを増幅させたのが明和年間(一七六四〜一七七二)に出された明和版の「奥の細道」です。元禄版と同一版木を用いたものですが、さらに三つの跋文を加えて一七七〇(明和七)年に同じ井筒屋から刊行された版本です。売れ行きは元禄版以上に好調であつたようですが、この明和版に不幸が襲います。与謝蕪村が亡くなって五年後の一七八八(天明八)年、京都の街のほぼ八割を焼き尽くす大火が発生します。御所、二条城、東本願寺へと次々と火の手が襲いかかる江戸時代最

大の京の大火でした。寺町二条に店のあつた井筒屋も類焼をまぬがれず、店にあつた版木もすべて焼失しました。しかし、「奥の細道」は不滅です。翌年の寛政元年にはすぐさま再版本が井筒屋から刊行されています。木版ですから明和版本を版下につかえばあつという間に翻刻は可能であつたのです。版木が消滅してわずか一年。読者からの再版希望が半端ではなかつたことをうかがわせます。「奥の細道」は充分に印刷・出版の商売のタネになる作品であつたのです。

芭蕉の死後百年ほどたつたこの時期から「奥の細道」が人々に広く知られる古典となり、読者を急増させていったのは何故でしょう。その理由を研究者は三pointsあげています。

一つは「芭蕉にもどれ」という芭蕉回帰現象が当時盛んであつたこと。俳諧人口の増加とともに芭蕉百回忌を迎え蕉風の再評価がなされていく中で芭蕉の作品への感心がたまつたこと。

また、一つは奥州へ行脚することが流行したこと。奥州が俳諧を志す者にとつて聖地ともいふべき地となり多くの俳人が出向ようになり、若き蕪村や一茶も奥州のあちこちを、おそらく芭蕉以上の熱意をこめてめぐりました。

そして、最後の一つは紀行文学が流行したこと。宝暦以降年間(一七五一〜)には八十点近くの奥州紀行文が書かれており、そのモデルとなつたのはいうまで

もなく「奥の細道」でした。

この「奥の細道」の読者の急激な増加は画家としても俳人としてもすでに高い評価を得ていた与謝蕪村に「奥の細道」の絵を渴望する気分とストリートにつながっていきます。与謝蕪村がその晩年に屏風と絵巻合わせて十点ほど描いたときされる「奥の細道」の絵を初めて手がけたのは一七七七（安永六）年八月のこと。蕪村六十二歳の秋でした。

二

蕪村がかいた「奥の細道」の絵で現存するのは真筆・写本あわせて六点あります。最初に描かれたのは先ほど述べた安永六年八月の作品です。この作品の仕掛け人は佐々木季遊という人で阿波藩出入りの京の商人で屋号は桔梗屋といいました。蕪村の俳諧仲間であった儒者三宅嘯山の門人でした。この仕事は蕪村にとつて気持ちよくできた仕事のように一七七七（安永六）年九月四日の季遊宛の書簡で次のように書いています。

先だつて御求めの奥の細道の巻、出来仕り候。御ものずき甚だよろしく候ふて、したため候ふにもころよく大慶の至りに候。

「ものずき」とは趣向・趣味のこと。あなたの御趣向がすばらしくよかつたの

で、制作は快適にはかどりました、と語っています。季遊から「奥の細道」の絵画化というアイデアをいただいて、それに乗っかって蕪村が描いてみたところ、予想した以上にうまくいったという喜びを伝えていきます。そして、さらに次のようなことも言っています。

かやうの巻物は、随分洒落にこれなく候てはいやしく候て、見られぬ物に候。それ故随分と風流洒落を第一に揮毫仕り候。

「奥の細道」の絵巻を手がけたときの心境を書いた部分です。「風流洒落」をいちばんに心がけたと言っています。「風流洒落」とは、雅趣があつてさわやかなしやれつ気があることをいいます。かなり精魂こめて制作したからでしょうか、書簡の最後で次のように述べています。

この巻は愚老も一巻ほしく候。

これほどのできばえの作品を他人の手に渡したくない、手元に置きたいというのは作者の作品への愛着であり未練でしょう。とはいえ依頼を受けた絵を描きそれを売って生計をなしている蕪村です。作品への執着と見せておいて、その実、チャッカリと売り込み、高値の買い取り

を画策する戦略的な言葉かもしれませぬ。季遊の桔梗屋は京でも有数の富商で

すから。その点、プロの画家蕪村は抜け目ありません。

それはともかく、これ以後、十点ほどの「奥の細道」の絵を蕪村は描くわけですが、そのスタイルの特徴はほぼ同じです。

作品には「奥の細道」の全文がもれなく書かれています。蕪村は筆写するにあつた一様の筆跡ではなく変化をつける工夫をしていますので「書」にも自信があつた蕪村の筆跡を堪能することができ

ます。また、美術の作品として蕪村一流の俳画を楽しむことができます。俳画は蕪村が最も彼らしさが発揮された技というべきですが、この俳画タッチの挿絵が十カ所ほど挿入されています。現存する「奥の細道」の絵で見ると、同じ場面ではほぼ似通つた図柄となつていて恣意的な思いつきではなく計画的な構図で描かれたことが推察されます。きつと手元に下絵のような控えがあつたのでしょうか。ただし、似てはいても全く同じ挿絵数、挿入箇所、図柄が完全に一致するものはありません。それぞれが唯一無二の作品であり、それが注文主・購入者への礼儀、基本的な配慮だったのでしよう。

挿入されている俳画タッチの挿絵はすべてが人事的な場面であり「夏草や兵どもが夢の跡」といった感傷的かつ叙景的な図柄はありません。後から述べる「壺の碑」以外はすべて何らかの動きを示す

人物図になっています。

三

ここから蕪村の描いた「奥の細道」について述べようと思うのですが、最初に述べるのは「奥の細道」に描かれた絵、しかも女性の絵の話です。

「奥の細道」を通読して印象に残る女性といえばまず市振に出てくる二人の遊女でしょう。「一つ家に遊女も寝たり萩の月」という句が出てくる部分です。それ以外となると生きている女性ではないのですが、源義経の忠臣で義経とともに源平の合戦を戦つた勇士であつた佐藤継信・忠信の兄弟二人の嫁の話です。「奥の細道」の屏風・絵巻に描かれた女性の挿絵はこの二つの部分にあります。男性ばかりの絵となれば無粋な絵になると考えたからでしょうか、「奥の細道」の中になわずかに登場する女性の姿を描いているのはおもしろいのです。

市振では年若き遊女二人と老いたる男とが語り合っている場面が描かれています。この絵については何の問題も生じません。しかし、もう一つの佐藤継信・忠信の兄弟二人の嫁の絵、上に示した絵ですが、これについては注目すべきことがあります。

「曾良旅日記」によれば元禄二年五月二日、芭蕉一行は福島から「信夫文字摺」で有名な信夫の里を経て、飯坂温泉に向

う途中で佐藤庄司（佐藤元治Ⅱ陸奥の豪

蕪村筆「奥の細道」画の継信・忠信兄弟の嫁の絵



族。佐藤継信・忠信の父で信夫庄の庄司であつた)の旧跡を尋ねるのですが、旧跡の近くにある古寺(医王寺)に一家の石碑が残されていました。これを見た芭蕉は感涙を流します。その部分は次のようになっています。

中にも二人の嫁がしるし、まず哀れなり。女なれどもかひがひしき名の世に聞こえつるものかなと、袂を濡らしぬ。

「嫁がしるし」が何を指しているのか、はつきりと分かりません。現代の注釈たとえば岩波文庫(秋原恭男校注 1979年刊)では「佐藤継信・忠信兄弟の妻の墓

標をさす」とありますが今はどこにも見当たりません。妻の墓標説のある一方で蕪村が生きていた当時は別の説が有力でした。明和版の「奥の細道」が出て七年後の一七七八(安永七)年に刊行された蓑笠庵梨一(さりゅうあんりいち)による注釈書「奥細道菅孤抄(おくのほそみちすがこもしょう)」では佐藤兄弟の嫁の木造であるとして次のように書いています。

この寺は甲冑堂といふ。佐保川の辺りにあり。佐藤次信・忠信の二人が妻の甲冑を着けたる木像あり。故に堂の名とす。兄弟戦死の後、二人の嫁、甲冑を着し、軍戦の装ひをなして、このれる老母を慰めしと言ひ伝ふ。

左に示した蕪村の絵はこの梨一の話に立脚して書いたと思えますが、それだけではないようです。先ほどの季遊の書簡に次のような一節があります。

巻中に女武者の像二人これあり候。

これは文中にこれあり候ふ通り、信夫の郡鑑摺(あぶみずり)と申すところに古寺これあり。その寺に次信・忠信二人の内室の像これあり候。すなはち甲冑を着し、一人は弓箭を取り、一人は剣を按じおり。先年、愚老松島行脚の節、見置き候。はなはだ懐旧の情に堪えぬ所にて候。それ故、右の婦人の像をしたため候。これまた巻中の模様

相成り候。蕉翁この所の発句は五月五日の発句ゆゑ、右の女武者を、かぶと人形にて五月に飾る物と御見違ひ(おんみちがいに)なら候ふてはいかがと存じ候につき、くわしく書き付け候。

この記述によれば甲冑を着し武装した佐藤兄弟の妻の姿を刻んだ二体の木像を蕪村は実際に見たということになります。彼が松島行脚をしたのは三十歳前のこと

ですから、還暦を過ぎた老人にとつては遙か彼方にある昔のことです。しかし、蕪村はほんの昨日のことのように書いています。それほどまでに二体の女性像は強烈な印象を蕪村に与えたのでしよう。この挿絵を描くときに何かを参考にした

という形跡もないので、自分の記憶に残る姿をしつかりと思ひ起こして描いたに違いありません。それだけではなく御丁寧にも注意書きまでしています。芭蕉翁が「奥の細道」の、この場面で「笈(おび)も太刀も五月にかざれ紙幟(かみのぼり)」という句を置いているので、そこからの連想で五月五日に飾る兜を着けた人形だ、と勘違いしてはいけない、と。自分の記憶にある木像に蕪村はよほどのこだわりがあつたようです。息子二人を戦争で失つた老いた姑のために甲冑を着た二人の女性の姿にどのような感慨を持ったのか、それを知る何の手がかりもありませんが、それを知りたくもあります。また、蕪村の描いた「奥の細道」の屏風・

絵巻は芭蕉が推敲を重ねて完成させた「奥の細道」に蕪村がどう対していたかを測る材料ともなることを、この二体の女性像の図は示しています。

四

先ほど述べたように蕪村による「奥の細道」の屏風・絵巻は本文のすべてが写されており、それに挿絵をつけたものです。本文を正確に写そうとしたとき問題になるのは本文そのものにある誤りをどうするかという問題です。蕪村が「奥の細道」の全文を写そうとしたとき手元にあつたのは明和版であり、明和版は元禄版と同一の版木であり、元禄版は芭蕉自筆の原本を忠実に写したとされる清書本(「西村本」といわれている)を元に作られています。だから、蕪村は明和版の「奥の細道」を手にしたとき、この本は芭蕉が書いたそのままを伝えた本だと考えていたはずで、そこに間違いを発見したときどうするか。その例を 一カ所あげると芭蕉一行が加賀の山中温泉に到着して風呂に入ろうとする場面です。

温泉に浴す。その功有明に次ぐといふ。

いうまでもなく「有明」は「有馬」もしくは「有間」の間違いです。「有明」では意味が通じません。芭蕉の間違いか清

書のミスか、分かりませんが明らかかな誤記です。

さて、これをどうするか。原文通りに筆写するか、誤りは改めて写すべきか。俳聖芭蕉の文章であるから一字たりともさわるべきではない。とはいえ事実の誤記、客観的な誤謬は是正する、それこそが芭蕉の真意を伝えるのか。蕪村はかなり困ったようです。現存する作品を見ると最初、たとえば京都国立博物館本では「有明」のままでしたが、翌年制作の山形美術館本では考えを変えて「有馬」に訂正しています。本文上の破綻はなくなりましたが、俳聖の文章を勝手に変えたとは非難されかねません。悩ましい微妙な問題です。

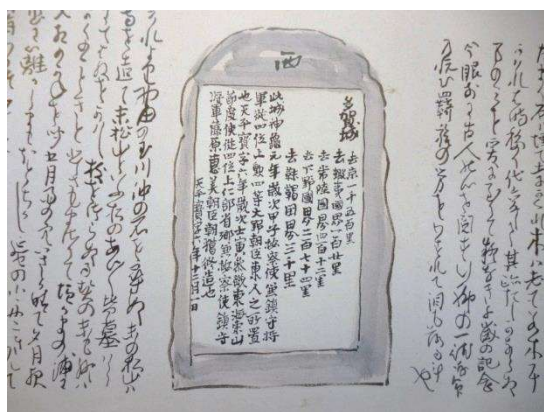
この「有明」以外にも日光の「墨髮山」はもちろん「黒髮山」の誤りであり、小松に出てくる斎藤別当実盛の名前が原作には「真盛」と誤記されています。また敦賀で芭蕉を迎えた路通は「露通」と表記されています。蕪村はこうした誤謬・誤記を最初は原文のまま写していました。が、途中から正しく筆写するようになっていきます。

こうした校正・改訂の問題で蕪村を最高に悩ませたのは「壺の碑」の場面でした。

蛇足ながら「壺の碑」は多賀城碑と現在ではいわれており七六二(天平宝字六年)十二月一日に建碑されました。奈良時代に建設された多賀城の修築記念に建碑

され重要文化財に指定されています。修造の責任者となっている恵美朝臣朝獺(えみのあそんあさかり)は七六四(天平宝字八年)年に恵美押勝の乱を起こした恵美押勝、つまり藤原仲麻呂の子です。乱のときに父とともに琵琶湖西岸で斬られました。

左の写真は京都国立博物館本で蕪村は碑の姿までをも写しています。この挿絵の直前までが「壺の碑」についての本文です。



「壺の碑」の本文ではその前半部分で碑文の内容を摘記して書いていますが、そこが一番ややこしい問題をはらんでいます。その芭蕉が書いた原文を、碑文を摘記した部分ですが、次に示します。

此城、神亀元年、按察使鎮守符將

軍大野朝臣東人之所里也。天平宝字

六年、参議東海東山節度使、同將軍

恵美朝臣□修造而。十二月朔日。

□の部分は原文では見えない文字ではありませぬ。部首は「矛」(けものへん)で旁(つくり)は「萬」という字となつてゐる漢字です。この漢字は諸橋の大漢和辞典にも再録されていないという摩訶不思議な漢字であり、もちろん読み方も不明です。念のため碑文を翻字によつて関係する部分だけを示してみます。

此城神亀元年歳次甲子按察使兼鎮守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也天平宝字六年歳次壬寅参議東海東山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎮守將軍藤原恵美朝臣朝獺修造也

天平宝字六年十二月一日

比べてみてすぐ分かるのは「所里」の「里」は誤読で「置」が正しいということ。また、「恵美朝臣□修造而」では「朝臣」の後の「朝」が抜け落ちていて「□」は誤読、そして「而」は「也」の間違いです。「置」を「里」と誤読したと書きましたが、芭蕉は実はよく読めなかつた

らしく碑文をメモした自筆懐紙には「里」という字を一度は書いていますが、その後「此字不明」としてあります。「而」の間違いは御愛嬌といふべきかもしれませんが、「□」は世界のどこにも存在しない漢字です。原碑を見ても判読できなかった芭蕉がいったいどこからこの漢字をひねり出したのか。また、読めない漢字(「置」)をどうやって記すことができたのか。

実をいえば最近の研究では芭蕉は「奥の細道」執筆にあたってアンチヨコというか参考文献を手元に置いていたらしいことが分かっています。一六八二(天和二年)年に刊行された同時代の俳人大淀三千風編「松島眺望集」です。この書物に「壺の碑」の情報が詳しく載っているのです。しかし、便利な参考書として使つた「松島眺望集」には間違いがあり、それを見た芭蕉がそのまま踏襲してどこにも存在しない不思議な文字が出現したというわけです。ですから芭蕉には自ら誤つた情報を世に出したという自覚はまづなかつたでしょう。「松島眺望集」に限らず、当時、出されていた「壺の碑」の資料はどれも正確には読めていませんでしたから。

たとえば元禄七年つまり「奥の細道」成立の年に出た「奥州道中記」では「所置」を「処里」とし「獺」を「獺」としてあります。他の同時代文献に当たっても正確に解読した文献はなく、まだ誰も読め

なかったのでしょうか。この碑文の全文が正しく読めたのは一七二六(享保卅)年、蕪村が生まれた年に刊行された「多賀城壺碑考」によつてです。それは江戸金石学の一大成果といつてもよいものでした。

ここに至りて疑ひなき千歳の記念(かたみ)、今眼前に古人の心を閲(け)みず。行脚の一徳、存命の悦び、羈旅(きりよ)の労をわすれて、泪(なみ)だも落つるばかり也。

この石碑を眼前にした芭蕉は「奥の細道」の中で他の所では見せないほどの感激ぶりを記しています。奥州の歌枕に深い関心を持つて旅に出た芭蕉が千年前の遺物を見て歌枕の確証を実感したときの思いや知るべし、です。ですが、いかほどの感激があるうとも芭蕉には正確な判読はできていませんでした。

その一方で既に正確な判読の情報を手にしていた蕪村です。蕪村は迷います。原文尊重と正確な情報。どちらをとるかです。心は揺れたでしょうね。結果からいうととつた方向は妥協的なものでした。

安永七年六月の絵巻(海杜本)では筆写した本文は原文のままで挿絵の石碑の図には正確な碑文を書いています。その半年後に制作した絵巻(京博本)では本文の「里」を「置」に変えています。そ

して、安永八年秋に制作した屏風では本文も碑文に合わせて正確に書かれています。

先ほどの「有明」と同様に当初は原作の通りとしていたものから、事実を正確に書くという方へと徐々に態度を変えているのが分かります。

「奥の細道」が完成してから八十年あまりが経ち、いかに俳聖芭蕉の作品といえどもあちらこちらに綻びが見えてくるころでした。原作尊重か事実尊重か、悩ましい問題です。芭蕉を尊敬することは誰にも劣らなかつた蕪村です。原文を忠実に写すことは当たり前のことでしたが、やはり誤りは誤りとして最低限の訂正はしていく。蕪村のとつた態度は俳聖芭蕉の祖述に終始するということからはずれています。近代的な方へとわずかに近づいているような気がします。

五

最後にいささか興ざめな話となりますが、「奥の細道絵巻」の売り買いの話です。もとより絵巻に相場などあるはずはありません。売り手と買い手とのやりとりと信頼関係です。絵を描き売ることによつて生計を立てている蕪村です。できる限り高額の買い取りを期待するのは当然でしょう。

一七七八(安永七)年の初冬、蕪村は

「奥の細道絵巻」を描き上げました。次に示すのは名古屋へそれを売り込もうとした書簡の一節です。名古屋は芭蕉が「冬の日」五歌仙を巻いた場所です。それ以来、蕉風俳諧の特に盛んな土地であり富裕な商人のなかに多くの俳諧愛好者がいました。売り込みの地としては格好の場所でした。

貴境は文華の土地に候故、一本は残し申したく候。しかし紙筆の費えもこれあり候故、幸馬子などの財主の風流家にとどめ申したく候。

暁台・土朗宛 安永七年十月二十一日付

「貴境」は名古屋のこと。名古屋は文化華やかな土地だから「奥の細道絵巻」の一本くらい欲しいですよ、と蕪村は売り込んでいます。幸馬子は名古屋在住の有名な俳人暁台の門人であり名古屋ではかなりの商人でした。「財主の風流人」とは金持ちで俳諧などの趣味を持つ者こと。あらゆるツテを頼つて「材料費もけつこうかかっているんだから高く売らな」といとう魂胆で売り込もうとする蕪村の人間臭い一面もこの書簡からは見ることができません。

【補足】

1 掲載した碑文の前後の本文翻読

たまり石に埋て土にかくれ木は老て若木にはれば時移り代変じて其跡たしかならぬ事のみを爰に至りて疑なき千歳の記念今眼前に古人の心を閲す行脚の一徳存命の悦び羈旅の労をわすれて泪も落るばかり也

壺の碑の絵

それより野田の玉川の石を尋ぬ末の松山は寺を造て末松寺といふ松のあひく皆墓はらにてはねをかはし枝をつらぬる契の末も終はかくのごときと悲しさもまさりて塩がまの浦に入相のかねを聞五月雨の空いささか晴て夕月夜幽に離がしまもほとちかし種の小舟こきつれて

2 日本の有名な古碑

奈良時代以前の石碑で国宝、重要文化財等に指定されているのは次の四点です。

① 多賀城碑 (宮城県多賀城市)

七六二年建碑 重要文化財

多賀城の修築記念に建てられた。

多賀城の建設、修築の過程などが

刻まれている。

② 多胡碑 (群馬県高崎市)

八世紀後半建碑 特別史跡

七一年に多胡郡が設置されたのを記念して建てられた。当時の中央からの命令が刻まれており、藤原不比等の名前も見える。

③ 那須国造碑 (栃木県大田原市)

七〇〇年建碑 国宝

那須国造で評督に任じられた父の事績を息子たちが顕彰するために建てられた。

④ 宇治川断碑 (京都府宇治市)

六四六年建碑とされているが諸説あり。ただし九世紀までは時代が下らないとされる。重要文化財僧道登が宇治川に架橋した由来を記した石碑の断片。

隠された歴史(40)

満田 正賢

今回は日本書紀が「斉明天皇」として描いている人物に迫りたいと思います。

このテーマは「隠された歴史(20)」でも取上げています。まず、「隠された歴史

(20)」で考察した内容を改めてご紹介します。

斉明天皇は孝徳天皇の死去のあと皇極天皇が重祚したものと記されていますが、この重祚自体に疑惑があります。舒明紀・皇極紀と斉明紀の記述を比べてみましょう。

舒明紀…宝皇女(皇極・斉明)を立てて皇后とした。后は二男一女を生んだ。一は葛城皇子(天智)という。二は間人皇女(孝徳の皇后)という。三は大海皇子(天武)という。

皇極紀…天豊財重日足姫(あまとよたからいかしひたらしひめ)天皇(皇極)は淳中倉太珠敷(ぬなくらのふとたましき)天皇(敏達)の曾孫、押坂彦人大兄皇子の孫、茅渟(ちぬ)王の娘である。母は吉備姫王という。

斉明紀…天豊財重日足姫は、はじめ橘豊日(たちばなとよひ)天皇(用明)の孫の高向(たかむく)王に嫁して漢(あや)皇子を生んだ。のち息長足日広額(おきながたらしひろぬか)天皇(舒明)に嫁して、二男一女を生んだ。

舒明紀、皇極紀には皇極天皇が舒明天皇と結婚する前に他人に嫁いでいたという話はいっさい出てきません。そもそも

も舒明天皇が他人に嫁いで子までいる女性を皇后に迎えたという話が事実であれば、それなりのエピソードがあつてしかるべきです。その記述が斉明紀になつて突然出てくるというのは明らかに異常です。

皇極天皇は信頼していた蘇我入鹿を目前で中大兄皇子(天智)たちに殺され(乙巳の変、そのショックで退位を決心します。そして皇極天皇の同母弟の孝徳天皇が即位し、中大兄皇子が皇太子となります。中大兄皇子は推古三四年(六二六年)の年)の生まれなので、孝徳大化元年(六四五年)に二十歳で皇太子になったことになりません。孝徳天皇はいわゆる大化の改新を行い、難波京を建造したとされていますが、中大兄皇子たちがかつてに難波京を引き上げたことに悲観し六五四年になくなります。ここで斉明(皇極)天皇が再登場するわけですが、この時皇太子である中大兄皇子は二十九歳であり、中大兄皇子がそのまま即位するのが自然です。皇極天皇は蘇我入鹿の死に絶望し政治の世界から離れた人物です。

それが中大兄皇子を差し置いて政界に復帰するとは考えにくいことです。皇極天皇重祚の事情が記されていないのは全く不自然です。

さらに不思議なのは、そういう人物が新羅・唐との戦いに備えて筑紫の朝倉宮に遷居しそこで亡くなることです。および皇極天皇のイメージと斉明天皇のイメ

ージは合いません。古田武彦氏は「皇極天皇と斉明天皇は同一人物ではなく皇極天皇は近畿王朝の大王であり、斉明天皇は九州王朝の天子である」という仮説を様々な角度から論証しています。(九州王朝終末期の史料批判―白鳳年号をめぐって)―古代に真実を求めて第一五集・明石書店」に収録)私もこの古田氏の見方に賛成しています。

ところで、新しく古田史学の会編集長になった大原重雄氏が、昨年八月の古田史学の会例会で「狂心の渠(たぶれころのみぞ)は水城のことだった」という非常に興味深い発表をしました。(古田史学会報 No.106)その論文で大原氏はこのように述べています。

「斉明紀のいわゆる狂心の渠は、通説の理解では斉明が宮の石材運搬の為に作ったと説明されている。(中略)しかし、…狂心の渠に三万、垣作りに七万と、それぞれが多数の人手を使ったと言っているのだ。(中略)三万人余りも使う渠を掘る大工事とは水城のことではないか。そして多数の石を東の山に重ねて、垣をめぐらすのは百間石垣に代表される山上の大野城や基肄城などのもう一つの工事であり、ここに七万人余りを費やしたのだ。」

「水城」とは太宰府市の手前にある巨大な遺跡です。それは高さ10mにもなる土塁と、土塁に沿った幅60m、深いところで四mにもなる濠と、土塁の反対側

の内濠によって構成されている遺跡で、長さ十二kmにわたって続いています。

大原氏は、水城が高度な大土木工事であるとして、工事手順を丁寧に説明しています。そして水城は天智天皇が大宰府防衛の為に作ったと日本書紀に記されていますが、これだけの規模の大工事は、白村江の敗戦の後、唐の軍隊が押し寄せようとしている時期に出来るものではないと考察しています。私は、この大原論文によって日本書紀が描く「斉明天皇」が九州王朝の天子である可能性が極めて強くなったと考えます。

ここからは、私の新しい考察です。私は、大原論文を受けて九州王朝の天子たる「斉明」の行動を改めて辿った結果、斉明が「狂心」、すなわち大宰府が唐の軍隊によって蹂躪されるのではないかという強迫観念により、精神的に著しく不安定な状態に陥って、健康を害していたのではないかという新しい仮説に至りました。この仮定によって今まで分らなかった斉明の伊予の熟田津での二ヶ月にもわたる逗留、朝倉宮での崩御などの合理的説明が出来ると考えます。

まず、日本書紀、三国史記にもとづく時系列的把握をします。

六四三年…新羅が唐に百済・高句麗の侵略に対する救援を求める。

六四七年…唐が高句麗攻撃を開始。

六四九年…唐、太宗の崩御により遼東の戦役を中止。

六五三年…百済が倭国との国交を結んだ(三国史記・百済本紀)

六五五年…斉明の即位(皇極の重祚は日本書紀の建前)。

高句麗が百済・靺鞨と連合して新羅の二十三城を奪取した為、新羅が再度唐に援軍を求めた。

六五六年…斉明「狂心の渠」を造る。

六五八年…斉明、紀温泉に行く。有間皇子の謀反。

六五九年…百済の侵攻に対して、新羅が唐に出兵を求める。

六六〇年…新羅・唐の攻撃により百済が滅亡。

六六一年…斉明、伊予の熟田津での二ヶ月逗留。その後朝倉宮に遷都。

六六三年…白村江の敗戦。

六五三年に「百済が倭国との国交を結んだ」という百済本紀の記事については、補足が必要です。百済本紀中には「国交を結んだ」という記事が二回出てきます。

五二五年の新羅との国交、六五三年の倭国との国交です。しかし、両記事に相当する記事は、新羅本紀、日本書紀にありません。おそらく新羅側、倭国側からは秘匿されたと思われます。百済本紀を見ると、歴代新羅との関係は「和親」とい

う表現で記され、倭国・梁との関係は(通好という表現で記されています。「国交を結ぶ」という表現は特別な意味を持つていると思われる)。

新羅本紀には、五二四年に、「王は巡幸して、南部国境地帯の勢力を拡大した。加耶国王が来て、会盟した」という記事があります。新羅本紀によると、新羅と百済とは四三三年に講和した後、五回にわたり、両国協力して、高句麗・靺鞨の

侵攻を防いでいます。(四八一年には加耶も参加しています。)新羅と百済の協力関係は、五五〇年に新羅が高句麗と百済の抗争に乗じて両国の城を掠め取ったことによって終わります。新羅が秘匿した五二五年の百済との「国交」は加耶と同様「会盟」(盟約を結ぶ)同盟)ではな

かったかと思われます。百済本紀に記された「国交」が同盟の意味を持つとすると、六五三年に倭国との間で結ばれた「国交」も同盟であったと思われる。すでに六四七年には唐が新羅の要請を受けて高句麗に侵攻しています。百済は唐・新羅との抗争に備えて倭国と同盟を結んだと思われる。そして日本書紀は、その史実を秘匿したので

はないか。なお、百済本紀に「元々「会盟」と書いてあったものを、三国史記の編者が「国交」と改めた可能性もあると考え

えます。

斉明の即位(重祚)年次は、孝徳の死去との関係で六五五年になっていますが、

九州年号は六四七年に常色に、六五二年に白雉に、六六一年に白鳳に改元されており、九州王朝の天子たる「斉明」の即位は六三七年か六五二年である可能性が強いと思われま。すなわち、「百済が倭国との国交を結んだ」六五三年時点では「斉明」はすでに九州王朝の天子であり、「斉明」自身が百済と同盟を決断したということが推定出来ます。

「狂心の渠」が造られたには六五六年(斉明二年)であると日本書紀は記していますが、これは単に「斉明」即位後であるという史実を表していると考えられます。しかし、蘇我赤兄が指摘した「斉明」の三つの失政が、有間皇子の謀反が起きた六五八年(斉明四年)までに為されていることは間違いありません。六五八年はまだ百済が新羅に侵攻している時期です。大原論文は「狂心の渠」が大宰府水城の造営のことであり、蘇我赤兄が有間皇子に語った「斉明」の三つの失政が、①大宰府の食料備蓄、②水城の造営、③大野城の造営、のことであると示しています。大宰府防衛に狂信的に邁進する「斉明」の行動には、何等かの心理的な原因があったと思わざるを得ません。

「斉明」は、「現時点では百済が優位に立っているが、唐は強国であり百済と同盟を結ぶのは危険である」という慎重派の意見を退け、对新羅強行派の意見を受け入れて百済との同盟を決断したと思われる。それと同時に、「百済が唐・新羅

連合軍に敗北し、その後百済と同盟している倭国が唐によって蹂躪される」という恐怖にさいなまれるようになったのではないのでしょうか。私は、「斉明」がその強迫観念から、祖国防衛、特に大宰府の防衛力の強化に狂信的に突き進んだのではないかと推測します。おそらく、倭国の誰もが「斉明」の「狂心」を知っていたのでしょうか。そして天皇（天子）を直接非難することを避けた表現が「狂心の天皇」に変わる「狂心の渠」という表現だったのではないのでしょうか。

「斉明」は、二度にわたり温泉地に長期逗留しています。長期療養を必要とする何らかの心身的症状があったと推測出来ます。又、九州に別府など古代から続く有名な温泉地が多く存在しているにも拘わらず、九州から離れてはるばる遠い紀国や伊予国に出かけています。「斉明」は当然自らの病的症状とその原因を分っていたと思われまます。

有間皇子が紀温泉への行幸を勧めたのは、温泉療養という意味もありますが、九州から遠く離れた場所への避難という意味もあったのではないのでしょうか。あるいは、「斉明」は一旦難波宮に避難して、そこで有間皇子に紀温泉での療養を勧められた可能性もあると考えます。

しかし一方で、「斉明」は自らが九州王朝の天子であるという自覚もあったと考えられます。有間皇子の謀反は、王朝を乗っ取るうとする意図があったと考えら

れますが、「狂心の天皇」に国政を任せておけないという意識も働いたのではないのでしょうか。その為、紀温泉から直接大宰府に帰ろうとした「斉明」を牟婁の港で迎え撃とうとしたのではないのでしょうか。

「斉明」が熟田津から那の天津に行く行程を「御船還至于娜天津すなわち「還る」と表現していることは、古田史学の会の会員各氏が指摘しています。一方、中大兄は西征してはじめて海路に就いたと日本書紀に記されており、熟田津に向かう途中、大伯（岡山県邑久（おおく）郡）の海で大田姫皇女が大伯皇女を出産したエピソードにもリアリティがあります。私は「斉明」の熟田津逗留と中大兄の熟田津訪問とは切り離して考える必要があるのではないかと考えます。すなわち「斉明」は那の天津を出発して、那の天津に戻った。中大兄は難波を出発して、途中熟田津に立ち寄って、那の天津に向かった、ということなのです。

六六〇年九月五日に百済の達率が百済滅亡を告げています。そこで「斉明」の強迫観念が高まり、「斉明」は大宰府から伊予に逃げ出したのではないのでしょうか。難波宮に逃げ出さなかったのは、難波宮までの航路の長さに嫌気が差したなどの理由が考えられます。

日本書紀には、六六一年一月十四日に天皇の船が伊予の熟田津の石湯の行宮に着いたとありますが、これは、「斉明」を

大宰府に戻すよう、大宰府にいる九州王朝の重臣の依頼を受けた中大兄が、難波を出発して「斉明」の行宮に着いた時の出来事を記したのではないのでしょうか。「斉明」は三月二十五日に那の天津に戻っています。中大兄が「斉明」を説得するの二ヶ月を要したと考えられます。

合田洋一氏は「越智国にあった紫宸殿地名の考察」（古田史学云報 2010）において、愛媛県西条市壬生川に「紫宸殿」という地名が残っていることを指摘しています。「斉明」が百済滅亡の報告を受けて大宰府から逃げ出したとすると、伊予に逃げだし、半年近く滞在していた可能性もあります。石湯は、温泉ではなくサウナのような場所であったとも考えられますが、「紫宸殿」という地名が残る仮宮に一旦逃避した後、道後温泉に行幸して療養していた可能性もあると考えます。中大兄の二ヶ月にわたる説得によって「斉明」が九州に還ってきたとすると、「斉明」は当然、倭国の都であり強固な防衛陣地も築かれた大宰府に入って然るべきです。しかし日本書紀には、「斉明」が朝倉宮に遷都したと記されています。「斉明」は九州に戻っても、大宰府には入らず、大宰府の奥に位置する朝倉まで行って仮宮を建てた。これも「大宰府が唐によって蹂躪されるという強い強迫観念（狂心）」がなせる技だったのではないのでしょうか。

今回は貨幣の続きです。ゆうちょ銀行では、今年の一月一七日から硬貨で預け入れをする際に枚数に応じて手数料がかかるようになりました。窓口では硬貨の種類にかかわらず五枚までは無料ですが、五一枚から一〇〇枚までは五五〇円、一〇一枚から五〇〇枚までは八二五円、五〇一枚から一〇〇〇枚までは一一〇〇円で、これより多い場合は五〇〇枚増えるごとに五五〇円加算されます。

マルクスから学ぶ (111)

成瀬 和之

ゆうちょ銀行では、今年の一月一七日から硬貨で預け入れをする際に枚数に応じて手数料がかかるようになりました。

またATMで預け入れをする場合は、硬貨の種類にかかわらず一枚から手数料がかかります。一枚から二五枚までは一〇〇円、二六枚から五〇枚までは二二〇円、五一枚から一〇〇枚までは三三〇円です。子供たちがお小遣いで買ったお菓子の代金の小銭を駄菓子屋さんはどうすればよいのでしょうか？神社のお賽銭はどうするのでしょうか？ある乳酸飲料の配達員も六〇九円の集金をどうすればよいのか悩んでいるそうです。

ゆうちょ銀行の硬貨取扱手数料の有料化から、『デジタル・ファシズム―日本の資産と主権が消える』（堤未果著、NHK出版親書）を私は連想しました。

二〇二四年に来るXデーをご存じでしょうか？あと二年後です。

以下は『デジタル・ファシズム』の一七四頁からの要約です。

二〇一九年四月九日。

閣議後の記者会見で、麻生太郎財務大臣はこんな発表をしました。

二〇二四年度に、千円、5千円、一万円の三種のお札が新デザインに切り替わると言います。このニュースを聞いた時、あることを思い出してゾツとしたという声があります。

終戦直後の一九四六年。日本で行われた「封鎖預金」です。当時日本は、アジア太平洋戦争の資金調達のため国債を大量に発行し、国の財政が悪化していました。敗戦後に残った莫大な借金を帳消しにし、インフレを抑えながら国を復興させるために、政府が実施したのが「封鎖預金」です。政府は預金者が銀行に殺到するのを防ぐため、予告なしに突然次のような文言を発表しました。「預金封鎖を行います」ピンときた国民は慌てて銀行に走り、預金をできる限り引き出しました。だがここで政府は、さらなる発表をします。「お札は新しいデザインに切り替わります」その翌日、政府は封鎖預金

を開始しました。人々が銀行に持ってきた旧貨幣を数えると、一人一人の資産が明らかになります。

これを記録し、データが揃ったところで、いよいよ本命の政策を実行します。一〇万円を超える預金に財産税をかけたのです。財産税は資産総額が大きいほど税率も高くなります。

銀行に預けた預金を下ろそうとしても、政府が先に手をまわしていま した。一カ月の引き出し上限額が三〇〇円に設定されていたのです。政府は預金封鎖の理由について、「戦争で背負った国の借金、全国民で平等に背負いましょう」「これも全て日本経済の復興のためなのです」などと美しい精神論で飾り立てていたが、後になつて当時の渋沢敬三大蔵大臣の証言により、この政策に真の目的が財産税の徴収だったことが明らかになっています。

まさかそんな恐ろしいことが、と思うでしょうか？（中略）

政府のロードマップ案によると、すべての個人情報紐づけられたマイナンバーの導入は、新札が導入される前年の二〇二三年に完了するように設定されています。マイナンバーの口座紐づけによる国民の財産の把握、麻生大臣の

新札発行の発表、戦争の代わりにオリンピックとコロナパンデミック対策のための、大規模な財政出動。

多くの人が「預金封鎖の再来」を不安視するのは、不気味なほど一九四六年と同じ条件が揃っているからに他なりません。二〇二四年に登場する新一万円札のデザインに使われる渋沢栄一氏が、かつて預金封鎖を実施した渋沢敬三大蔵大臣の祖父だというのも、当時国民が受けたショックを思うと、何とも言えないブラックジョークでしょう。

堤未果さんの指摘に輪をかけるような新聞報道に私は驚きました。

この一月二六日の衆議院予算委員会、日本共産党の穀田恵二衆議院議員は、岸田政権が検討を進めている「敵地攻撃能力」保有の問題で、敵地攻撃をできるだけ相手を殲滅する「打撃力」を持つべきだとする安倍晋三元首相と同様の見解を岸田首相も示していた事実を明らかにしました。日本国憲法の改憲どころか壊憲です。福祉のためと言って導入された消費税が法人税減税、リニア中央新幹線などの大型公共事業そして軍事費に使われました。

同様に、竹中平蔵流のベーシックイン

カムという「わずかのお金」でごまかして、九条だけでなく憲法二五条（ゆりかごから墓場までの「健康で文化的な最低限度の生活」を保障するなどの社会保障）を破壊し、戦争準備に軍事費増大を目論んでいるのではないのでしょうか？

岸田政権の一九二二年度の防衛当初予算案は過去最大となり、臨時国会で成立した補正予算を加えると六兆円を超えました。

予算の内訳をみると、「敵地攻撃能力」保有につながる計画が目白押しで、最新鋭のステルス戦闘機F35A八機の取得、長距離離航ミサイル搭載のためのF26戦闘機の改修、射程一千キロの国産巡航ミサイルの開発、「いずも」型護衛艦の空母化改修、「いずも」に搭載可能なF35B四機の取得が計上されています。

日本国憲法第七章が合計九条もの条文を置いて「財政」について規定しているのは「九条への希求」と読み取るのは私だけでしょうか？財政民主主義について規定している日本国憲法第七章を読んだことがない人は、これを機会に読み、その歴史の意味を考えてみてください。

日本国憲法の改憲・壊憲を許さないために、今年の参議院議員選挙に向けて市民と野党の共闘を一層強固にするよう後押しすることが求められています。

先進国の中でドイツと日本がなぜ最もキャッシュレス化が進んでいないのか、

その歴史的意味を考えてみてください。

ゆうちょ銀行の硬貨取扱手数料の有料化は二年後に迫った二〇二四年のXデーの地ならし・「国民ならし」・ウォーミングアップでないことを願います。

参考までに一〇〇年前からの日本史年表を添付します。

- 一九二二年 日本共産党創立
- 一九二三年 関東大震災
- 一九二五年 治安維持法制定
- 一九二七年 金融恐慌
- 一九二八年 治安維持法を緊急勅令で最高刑死刑に改悪
- 一九二九年 治安維持法に反対した山本宣治暗殺
- 世界恐慌
- 一九三二年 南満州鉄道を関東軍の石原莞爾らが自ら爆破し、一五年に及ぶアジア太平洋戦争に突入
- 一九四五年 敗戦。アジアの人々2000万人以上・日本人310万人の死者、そして、膨大な借金。

俳句

土田 裕

三寒の一日何も手につかず
翔つ鳥の忙しき羽音寒の入
大寒の大河は流る湯気をあげ
白梅の蕾の未だうすみどり
香を運ぶほどの風出て梅の園

影山 武司

屈託を持って余す夜や室の花
質問をのらとかはせば鎌鼬
ブルゾンに野生の匂ふ背中かな
山茶花の散り敷く径の暗さかな
汽水湖の風に立つ竿寒蜩
アルコールの沁むる手指の悴めり
枯木立削ぎ落すもの削ぎ落し
母の背の丸き日だまり日脚伸ぶ
独り居の一人二役追儼豆
起重機の一段伸びて春近し

編集後記

SK生

▲オミクロン株が猛威を振るっている。前回の第五波では考えられないような感染者数である。頼りとするのはワクチン接種であるが、それも政府の思うようには進んでいない。加えてジワジワと上昇する物価。理由はさまざまに語られるが賃金が上がらず物価だけが上がっていく。いったい黒田バズーカ砲で威勢良く放ったお金はどこに消えたのかと怨みごとの一つもいたくなる。

▲こうした生活の不安や社会の不正への怒りを世の人に訴えようとするにはデモという手段が民主主義では用いられている。筆者も何度かデモに参加したことはあるのだが、近ごろ気になることがある。それはデモに参加する人々に歩道を行く人たちから浴びせかけられる冷笑、迷惑そうな表情である。世を覆う黒いしみのようにそれは増えているようである。これは決して思い過ごしではなく立命館大学の富永京子さん等が行った全国調査では「デモの参加者は社会のために行動しているので尊敬できる」とした人々が34%。それに対して「デモの参加者は自己満足で行動している」とこたえた人々は53%だったという。半数以上の日本人はデモへ冷たい視線を送っていたわけである。同じ傾向はボランテイアの参加者に対する見方にもあり「参加者は自己満足で行動している」とこたえる人々は5割を超えている。利益もないのに政治的な主張や公共の利益を訴える人などはいないという「性悪説」が広まっている。

▲そう考えていた矢先に起きたのがNHKの字

幕問題である。「河瀬直美が見つめた東京五輪」という特集番組で「五輪反対デモに参加している男性」が「実はお金をもらって動員されていると打ち明けた」という取材内容とは異なる内容が字幕でつけられた。NHKがこの事件で五輪公式記録映画の制作チームと視聴者には謝罪したが、五輪反対デモの主権者や参加者は「視聴者」に含まれるからということで謝罪を明言していない。この件に関してジャーナリストの青木理さんのコメントは痛快であった。「人間はカネや利害損得でしか動かないといった陳腐で貧困な偏見」に毒された人やそれに囲まれている人々の「卑しさ」がここにはあらわれている。これを読んでその通りと思わず膝を打つたのは筆者だけではないだろう。

▲何の利益もなく利他的行為をする人などはいないはずがないという考え方が蔓延しはじめる。そして、不正や不平等な扱いに怒り、人間として正当な要求を合法的に訴えている人々が卑小化され世の中から不可視化されていく。こうした社会の状況に対してブレイデニミかこさんは警鐘を鳴らし今こそ「エンパシー」が必要と説く。エンパシーとは「自分とは違う立場や考え方を持つ他者の感情や経験を想像する知的な能力」であり同じ感情を共感する「シンパシー」とは別物だという。「卑しさ」が人々の心に広がり、他者を理解する能力と意欲とが後退しつつあるかに見える今、ブレイデニミかこさんのいう「エンパシー」は貴重な提言に思える。

▲寒き生まれれば春遠からじ、とか。春陽の再び来たる日が待ち遠しい。

人生としての川柳 (続々)

現代川柳の礎を築いた六大家と呼ばれる人たちはどんな川柳を目指したか。その一端を見てみよう。

(1) 一人目は、村田周魚(しゅうぎよ)。一九二〇年(大正九年)、三十一歳で「川柳きやり吟社」を創立した。「現在作家の一部には自分の個性を打出して行くが故に、… 自分を露出して多角的に描こうとする作為が多く、したがって従来の川柳からみれば、川柳らしくないものが多くなって行く事である」と新潮流を批判し、古川柳の軽みや穿ちを擁護、「家庭におけるものが全部が楽しめる一番手近な文芸誌」を創ろうとした。新潮流とは、一例をあげれば、昭和初期のプロレタリア川柳「手と足をもいだ丸太にしてかへし」(鶴彬)や、新興川柳「人間を掴めば風が手に残り」(田中五呂八)などを指す。周魚の句を挙げる。

二合では多いと二合飲んで寝る
 あたんちは貧乏だよに親笑い
 大晦日こんど机をこう置こう
 老いてなを戀知る人の倅せな
 電柱に犬を眞似てるいゝ月夜
 箸ちよいと貸してといふも夫婦仲

日常の暮らしをうたって親しめる周魚の世界である。一九六七年(昭和

四十二年)死去、享年七十七歳。辞世の句。

花生けて己れ一人の座に悟る

(2) 次は、梶元紋太(すぎもともんた)。一八九〇年(明治二十三年)に生まれ、一九二九年(昭和四年)「ふあうすと川柳社」を四十歳で創立、『ふあうすと』を創刊した六大家の一人である。「私が川柳から享けた利益は実に莫大なものである。現に私は知識を啓発されつつある。川柳は私に向上心の発奮を促してやまない。勇猛精進の心を起こさせる。この故に、私は益々川柳に倚り、親しみ、終日わすれることができない」——二十八歳の時の述懐である。

「夜降る雪が積もる」ように、紋太も「大家」になった。「川柳は詩ばかりでなく洒落ばかりでなく機智ばかりでなく、要するに川柳は人間である」と説いた。飾り気のない人間ありのままを浮き彫りにする紋太の句。

よく稼ぐ夫婦にもあるひと休み
 投げそうなキャッチボールの中を
 抜け
 今乗った客をみつめる目ばかり
 木の上に人が居て下駄があり
 会えば笑い会わねば想い淵となる
 エプロンの葉書も一度晩に読み
 座ぶとんのない玄関で話しこみ

平明でわかりやすく端正な表現で愛され、親しまれた。

(3) 三人目は、前田雀郎(じやくろう)。一八九七年(明治三十年)生まれ、二十一歳のとき阪井久良伎の門を叩き、のち破門された。三十九歳のとき『せんりゅう』創刊、一九六〇年死去。川柳についてこう言う。「材料とは内容、料理法とはその表現の方法、川柳における内容というものは表現を得て、はじめてそこに生まれるものであつて、表現を離れて別に存在するものではない」と。「料理法」は幾通りもあるだろうが、しみじみとして哀愁にみちた句を詠み、「ペーソスとしての川柳」と評された。

音もなく花火があがる他所の町
 風の日的一本道となりけり
 男とはいつはり者よ泣かぬ顔
 退屈の猫に出て行くところが
 手の筋もさびしい時の足しになり

(4) 「東の最高峰」と言われる川上三太郎は一八九一年(明治二十四年)東京に生まれた。三十八歳で「国民川柳会」を創立、その会報が後に『川柳研究』となった。

川柳から「低俗、下品」を排し、「詩性川柳」を唱えて川柳の文芸性を高め川柳の裾野を広げた。低俗や下品を排し川柳の文芸性を確立する

—その思いは、川柳界の巨星・岸本水府(すいふ)や、水府と相競って大阪を川柳の一大都市に築き上げた麻生路郎(じろう)にも共通し、伝統川柳の大道を行くものであった。若い頃の詩性川柳には、
 新しき淋しみわきぬ海昏れぬ
 夜の呼吸は強く洋書の絵の句
 などがある。以下、三太郎の句。

雨ぞ降る渋谷新宿孤独あり
 酒さびし深夜孤を孤に徹しきる
 孤独地蔵花ちりぬるを手に受けず
 さぼてんにひとり娘のやうな花
 剃刀は取上げてから子を叱り
 もう一つ頭がほしい二日酔

後の三句は典型的な伝統川柳である。

六大家の残りの二人、麻生路郎と岸本水府については次回紹介する。

